

2. シンポジウムの開催とその経過

2-1. シンポジウム開催の目的

地研連が発足し伊研協に改組するに至るまで、またその後今日まで、加盟団体は、研究の成果を発表しあうことを通して、研究成果を共有し、地域研究の絆を強めようとしてきた。年に1回、シンポジウムを開催し、これを維持していくことで地研連の存在意義を確認していこうという設立当初の意志決定に基づくものである。

2-2. シンポジウム開催の要旨の変遷

シンポジウム開催当初は、「伊那谷を学ぼう」「伊那谷を知ろう」というテーマで開催された。やがて「後世に伝えたいもの・遺すべきもの」「天龍川一あり方を考える」というテーマに象徴されるような「地域を様々な切り口や方法で研究する団体・個人にとっての共通する地域の課題」がテーマとして提起されるようになった。

発足10年をむかえる第10回シンポジウムには、「伊那谷学の創造と地育力」が掲げられ、加盟団体を一つの研究団体とし、より広い視野とより高度な研究団体として、その方法論とともに、今後の方向性を重視しての取り組みが模索され現在に至った。

2-3. シンポジウム開催の成果

伊那谷の自然・歴史・文化について、一つのテーマを共通課題として、参加団体がそれぞれの研究分野の到達点を発表し、それらを素材として、学際的、学融合的な意見交換を行ってきた。それによって会員相互の知見が広がり、また研究団体間の連携事業が生まれた。それらによって、新たな研究視点が生まれ、問題意識が点から線へ、線から面へと広がってきた。

このような成果の行き着いたところが「伊那谷まるごと博物館」構想であり、「伊那谷学」であった。このように細々と続けられてきたシンポジウムではあったが、これこそが伊那谷固有の地域学を切り開くバックボーンとなってきたのである。